

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 10 集

2018（平成30）年度

東京神学大学

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号、平成 25 年 4 月 1 日改正施行）第 8 条による電子公表と併せ、2018 年度に本学に於いて博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録し、印刷公表に供するものである。

氏 名： 田中 光（東京都）

学位の種類： 博士（神学）

学位記番号： 乙第9号

学位授与の要件： 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第2項

学位授与の日付： 2018年10月2日

学位論文題目： 「新しいダビデと新しいモーセの待望：イザヤ書の^{カノニカル}正典的解釈」

審査委員会： 主査 東京神学大学教授 小友 聡

副査 東京神学大学教授 大住 雄一

副査 神戸女学院大学教授 飯 謙

内容の要旨

新しいダビデと新しいモーセの待望：イザヤ書の^{カノニカル}正典的解釈（要約）

田中 光

イザヤ書は世々に渡って、多くの人々に霊的刺激を与え続けてきた書物である。しかし、そのような、信仰の源泉としてのイザヤ書の役割は、歴史批評的研究の確立と共に、様々な形で挑戦を受けることとなった。殊に、批評的研究を通してもたらされたイザヤ書の包括的メッセージの瓦解は、特筆すべき自体であった。啓蒙主義以来、預言書の研究全般が、預言者の元来の意図を回復することに集中するようになったことに伴い、イザヤ書も、主に三人の預言者による預言の集合体であるとされ、その包括的メッセージの存在は疑問視されるようになった。

しかし、それにもかかわらず、20世紀後半以降のイザヤ書研究は、これまでの過度に分析的な研究の方向性を反省し、よりイザヤ書全体の包括的メッセージに注目した研究が、様々な方法論・アプローチによってなされ、注目すべき成果をあげてきた（カノニカル、共時的、編集史的、共時・通時的方法論）。ところが、このようなイザヤ書の包括的解釈の試みは、全ての面で成功しているとは言い難い。たとえば、私見では、イザヤ書における王的人物へのメシア待望が、イザヤ書が前半（1-39章）から後半（40-66章）へと移り変わるにつれて、どのような意義を持っているのかということに関する理解は、依然として不十分である。H.G.M.ウィリアムソンや、A.ラアトなど、多くの研究者は、イザヤ書の前半部分におけるメシア待望は、バビロン捕囚を歴史的背景として持つイザヤ書の後半部分においては、「苦難の僕」に代表される異質なものと変質している、という宗教史的視座に立った説明を展開している。しかし、このような理解に対して、B.S.チャイルズやC.R.サイツといった、「カノニカル解釈」の視座に立つ旧約学者たちは、そのような歴史的背景の違いを過度に強調した解釈が、イザヤ書全体のカノンとしてのメッセージを歪めてしまうと主張している。彼らによれば、イザヤ書の前半におけるメシア預言は、イザヤ書の後半において「僕」についての主題が優勢になる文脈においても、依然としてその意義を失ってはいない。

本稿ではチャイルズやサイツのインサイトに触発されて、イザヤ書の包括的指針を明らかにするために、イザヤ書のメシア的メッセージをカノニカルに読み解いてみたい。本稿が掲げるテーゼは次の通りである。イザヤ書 40-66章における主要な主題、すなわち、僕の任務、というものは、決して 1-39章におけるダビデ的希望の改定/改鑄では

なく、むしろ、神によって与えられた比類なき約束である。このような僕に関する主題は、イザヤ書の前半部におけるメシア的王についての主題と相互補完的關係にあり、従って、王の預言と共に、その終末的成就を待ち望んでいる。より具体的には、新しいダビデを待望するイザヤ書 1-39 章と新しいモーセを待望する 40-66 章は、相互に影響し合い、イザヤ書において統一されたメシア的待望を生み出している。

このテーゼを論証するために、本稿は、まず第 1 章において、本稿がその解釈的アプローチとして採用している、チャイルズの「カノンの解釈」の内容について明らかにし、この解釈的アプローチを本稿にどのようにして適用するかを論じる。続いて、第 2 章において、イザヤ書 1-39 章の四つの王の預言 (7:14; 8:23-9:6; 11:1-9; 32:1-8) と、関連するテキスト (4:2-6) の考察を行い、イザヤ書の王的メシアへの待望の内容を明らかにする。そして第 3 章において、イザヤ書 40-66 章における四つの僕の歌 (42:1-9; 48:16-49:12; 50:2-51:16; 52:13-53:12) と、関連するテキスト (40:1-11; 61:1-11) の考察を行い、僕に対する待望の内容を明らかにする。その後、第 4 章において、イザヤ書の前半で見出される王的メシアの待望と、イザヤ書の後半で見出される僕に対する待望が、相互補完的なものであることを示すための考察を、上に挙げたテキストを中心にして行い、同時にこの二つの待望の関連の本質についてより深めるための考察を行う。

以下、各章ごとに、議論の概要を述べる。第 1 章の考察を通じて、次のことが明らかにされる。チャイルズが言う「カノン」とは、単に共同体にとっての聖なる書物のリストのことではなく、むしろ聖書各書が形成され、編集され、最終的な定着を見るまでのプロセス全体のことである。チャイルズはこのプロセスを通して、聖書各書の多様な主題が、編集者たちによって関連付けられてきたことの故に、聖書の最終形態には、ある種のインターテクスチュアリティが存在すると述べる。このインターテクスチュアリティの存在の故に、聖書の最終形態こそが、カノンの解釈のための一義的な文脈である。聖書の編集者たちは、このインターテクスチュアリティ (あるいは「神学的文法」) を形成する中で、後の世代がそのような聖書各書の関連を認識することができるように、解釈のための枠組みを残している。しかし、チャイルズによれば、カノンの解釈は、この様な編集者の意図を正確に再現するものではなく、むしろその意図を汲みながら、歴史批評的ツールを用いつつ、聖書のメッセージを多様に表現すべきものである。チャイルズはまた、聖書の最終形態に刻印されたその様な解釈の枠

組みが、教会における聖書解釈の歴史を通して受容され、豊かな解釈が展開されてきたことにも注意を払っている。この教会の営みゆえ、カノンの解釈の射程には、教会の伝統的解釈が入っている。

この様に、チャイルズが構想するカノンの解釈は、聖書を巡る多様な文脈からアプローチするため、その実際の解釈は、複層的な次元を持つ（旧約の字義的意味、旧新約の意味、神学的リアリティーから解釈される聖書の意味）。本稿では、チャイルズが構想するカノンの解釈を余すところなく実践するのではなく、むしろ日本におけるチャイルズを受容が十分でない現実に鑑みて、その部分的な適用（すなわち、旧約の字義的意味の探究）を試みる。

第1章において表明された解釈的アプローチに則って、第2章以下の考察で、実際にイザヤ書の包括的メッセージが、メシア的テキスト、僕テキストの考察を通して、論じられる。第2章では、上記五つのテキストの考察を通して、次の点が明らかにされる。まず、1-12章に属している三つの王の預言においては、共通して、ヒゼキヤを媒介とした、地上的待望と終末論的/将来的待望の弁証法的な時間の枠組みが観察され、このような枠組みを通して、新しいダビデが待望されている。つまり、これらのテキストが語っているヒゼキヤの支配は、終末論的なダビデ的王の到来を確証する「しるし」として機能しているのである。

その上で、この三つの預言には、互いに密接に関連した、それぞれ独自の強調点が存在する。まず、インマヌエル預言においては、シリア・エフライム戦争の歴史的枠組みの中で、ヒゼキヤの誕生を通して、神がダビデ王家に絶えることなく関わりを持ち、その支配を確立してくださることが約束されている（7:14）。続く8:23-9:6の預言においては、アッシリアの脅威の中でヒゼキヤが統治を開始することを通して、終末論的なダビデ的存在による永遠の支配の幻が確証されている。最後に、イザ 11:1-11の預言においては、エルサレムに差し向けられたアッシリアの力にもかかわらず、揺るぐことのなかったヒゼキヤの支配を通して、終末論的なメシアの到来を通して示される神の現臨（11:2）が保証されている。この様に、この三つの王の預言は、イザヤ書が提示する歴史的枠組みの中で、新しいダビデに関するヴィジョンを展開しているのである。三つの王の預言において提示されている以上のような幻は、これらの幻に共通していた弁証法的関連を保ちつつ、イザヤ書32:1-8そして4:2-6における「メシアと共同体」という主題を通して、更に豊かなものとして提示されている。

続いて、第3章においては、上記六つのテキストの考察を通して、次の点が明らかにされる。この四つの僕の歌は、「以前のこと・後の/新しいこと」というイザ40章以降の弁証法的な時間の枠組みの中に埋め込まれており、従って、捕囚後の歴史的文脈に根ざしつつも、終末論的な成就を望み見たメッセージとして提示されている。四つの僕の歌が提示する歴史的次元の意味として、次のような主題的展開が見出される。すなわち、第一の僕の歌（イザ42:1-9）における僕としてのイスラエルは、第二の僕の歌以降（48:16-49:12; 50:2-51:16; 52:13-53:12）、その働きを、無名の預言者的人物に移譲することとなる。この主題的展開と密接に関連する形で、全ての僕の歌において、新しいモーセに対する終末論的待望が見出される（特に、第四の僕の歌におけるモーセとの予型論的関連は顕著であり、注目に値する）。この終末論的人物の到来によって初めて、イスラエルと無名の預言者的人物の働きは完成されるのである。

このような僕に関するダイナミックで奥行きのあるメッセージは、他のテキストを通して準備され（40:1-11）、更にドラマチックに展開されている（61:1-11）。まず、イザ40:1-11に関しては、これを「第二イザヤ」の召命記事としてではなく、むしろイザヤ書の包括的な主題的展開の中に位置づけられるべきメッセージとして解釈すべきである。この視点に立つと、このテキストに見出される二つの主題（「慰め」としての罪の赦し、王としての神の顕現）を通して、第四の僕の歌に至る終末論的な主題的展開が準備されていることが明らかとなる。次に、イザ61:1-11に関しては、このテキストの「私」（1節）が、僕の性質を示しており、従って少なくともイザヤ書の最終形態においては「僕」として提示されていると考えられる。更に、このテキストは、第四の僕の歌で仄めかされていた「僕たち」に関する主題的展開の中に位置づけられている。具体的には、「僕」の働きを引き継ぐ「僕たち」は、僕のイニシアティブに導かれながら、異邦人を新たに加えた新しい礼拝共同体を、「祭司の王国」として建て上げていく。この様に、この二つのテキストは、新しいモーセとしての僕の贖罪の死とその栄光化について既に準備し（40:1-11）、更にこの人物によって導かれた礼拝共同体形成の終末論的ヴィジョンについて展開しているのである（61:1-11）。

以上の様な「新しいモーセ」の終末論的待望は、イザヤ書のカノンの文脈の中では、イザ1-39章における「新しいダビデ」の終末論的待望と共鳴し、イザヤ書全体として一つのメシア的ヴィジョンを形成していると考えられる。両者は共に、イザヤ書の提示する時間的枠組みの中で異なる文脈に属してはいるが、しかしこの二つの待望

が共に将来における成就を待ち望んでいる事柄として提示されているという事実は、二つの待望の間を「概念の発展・進化」と説明することに疑問符を付す。むしろ、「新しいダビデ」と「新しいモーセ」の待望は、共に終末論的成就を望み見ている待望として、イザヤ書の最終形態において相互補完的な関係にあり、イザヤ書全体の包括的メシア像形成に寄与していると考えられるのである。

このような見方の正当性を確認するために、第4章において、イザヤ書のカノンの提示においては、この二つの待望が相互に結びついたものとして提示されていることが、王の預言と僕の歌、そしてその他関連するテキストの考察を通して論じられる。これらのテキストにおいては、その最終形態の提示において、ダビデ的/王的要素が、モーセ的/出エジプト的要素と密接に結びついている有様が観察される。このような二つの要素の結びつきが王の預言と僕の歌を中心に見出されたという事実は、イザヤ書のカノンの提示において、ダビデ的待望とモーセ的待望が、互いに排他的なもの・思想的発展の段階に位置づけられるべきものとしてではなく、むしろ、相互に密接に関連した、一つの終末論的メシア待望を形成するものとして提示されていることを示唆していると考えられる。この理解は、歴史批評的研究が提示してきたような、一方が他方へと変質した、という理解とは別の解釈の筋道を提示している。

第4章では更に、イザヤ書のカノンの提示において示されたこのような二つの待望の関連は、(必ずしも編集者の意図の限定されない)カノンの解釈として引き出されたものであると同時に、二つの密接に関連する「生の座」にその歴史的基礎を持っているということをも補足的に論じ、このダビデ的待望とモーセ的待望の関連の性質を更に探究している。私見では、この二つの要素の関連は、「律法と預言者」という神学的文法を錬磨していく営みと、その営みと密接に結びついていた共同体の礼拝という営みとに歴史的足場を持っていたと考えられる。第一の視点の正当性に関して、チャップマンが考えるカノン(律法と預言者という神学的文法)形成に固有な要素が、イザヤ書のメシアテキスト(王の預言、僕テキスト)を中心に確実に見出されることが根拠として挙げられる。次に、第二の視点の正当性に関して、イザヤ書のメシアテキストには詩編の要素が密接に結びついており、従ってそこに礼拝的エートスが存在していることが、その根拠として挙げられる。

この様に、第4章の議論全体を通して、イザヤ書のカノンの提示においては、ダビデ的待望とモーセ的待望が密接に結びついた形で提示されており、しかもこの関連は、

カノンの提示のレベルにおいて浮遊しているものではなく、むしろ共同体の神学的文法を練り上げ・継承していく礼拝的営みにおいて基本的な「生の座」を持っていることが論証される。

本論文全体の結論部においては、以上の議論を踏まえて、イザヤ書の前半部におけるメシア待望と、後半における僕に関する待望が、相互補完的な関係にあり、「新しいダビデと新しいモーセの待望」という一つのメシア待望を生み出しているという本稿のテーゼの正当性が、改めて述べられる。そして更に、この結論と本論文全体の議論を受けて、三つのことが、本論文の示唆するところとして述べられる。第一に、本稿が明らかにしたイザヤ書の豊かなメシア的ヴィジョンは、旧約全体のメシア的ヴィジョンもまた、従来考えられているよりも、相互に関連した奥行きのあるものであることを示唆している。第二に、本稿が採用したカノンの解釈は、本稿が到達したイザヤ書の豊かなメッセージに鑑みると、今後、旧約研究において用いられ続けることで、旧約全体の持つ独自の神学的意味を明らかにすることができると思われる。そして第三に、イザヤ書のダビデ的待望とモーセ的待望が、礼拝営為を通して関連しているという事態は、旧約カノンの解釈にとって重要なことが、単に歴史批評的ツールを巧みに使うことだけでなく、同時に礼拝的生とそこにおける神学的思索でもあることを示唆している。

以上に述べた、本論文が示唆する三つの視点に相即する形で、今後の筆者の研究の展望が見えてくる。第一に、イザヤ書のメシア待望が、詩編のそれと密接に関わっていることから、今後、詩編の研究が欠かせないものとなる。第二に、チャイルズが提唱したカノンの解釈の実践は、本稿で十分に実践できなかった教会の聖書に対する応答（解釈）の研究と密接な関係にある故に、今後この分野の研究が必要となる。そして第三に、イザヤ書の形成が礼拝と密接な関係を持ち、それ故に我々の聖書解釈も、礼拝に根ざした神学的思索が必要となるということは、今後、自らの学問的テリトリーだけに固執することなく、むしろ信仰者のあり方全般、そして神学の諸部門との密接なかかわりの内に、その営みを見出していく方向性を提示している。

審査結果の要旨

田中光 学位請求論文 (博士 神学)

『新しいダビデと新しいモーセの待望：イザヤ書の正典的 (カノニカル) 解釈』

審査委員会：主査 東京神学大学教授 小友 聡
副査 東京神学大学教授 大住雄一
副査 神戸女学院大学教授 飯 謙

評価書 小友 聡

1. 主題の設定と目的

本論文のタイトル「新しいダビデと新しいモーセの待望：イザヤ書の正典的解釈」は、主題と内容を的確に説明する。論文は、その問いの立て方においてすでに論文の意義がおのずと見えてくると言われるが、本論文も確かにそうであって、イザヤ書の一貫した統一的な読み取りをすべく、結論に向けて極めて学術的で独創的な議論が展開される。

19世紀の Duhm 以来、イザヤ書は三部に分けられ、それぞれが異なる時代背景を有するという理解がほぼ定説となっていたが、1990年代以降、イザヤ書を従来の枠組みで捉えるのではなく、イザヤ書全体で捉えるという新たな試みがなされるようになった。日本でも、大島力氏の『イザヤ書は一冊の書物か？ イザヤ書の最終形態と黙示的テキスト』(教文館)が2004年に刊行され、イザヤ書研究の方向は大きく変わった。もはや第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤという三人の預言者に依拠させるのではなく、イザヤ書全体を包括的に、また統一的に捉えようとする方向に傾きつつある。それはイザヤ書の最終形態を重視して、しかもあくまで歴史批評的な方法、すなわち編集史的方法によってイザヤ書を説明するものである。とりわけ、イザヤ書の全体構造に目を向ければ、冒頭2章と結末66章は共に終末思想に彩られ、いずれも神殿礼拝的関心が濃厚であるゆえに、イザヤ書が最終的に全体として枠組みを有していることが明瞭に説明できる。それにもかかわらず、最近のイザヤ書解釈はいまだ定説を完全に覆すには至っておらず、試行錯誤の試みがされているという現状である。本論文はそのようなイザヤ書研究の状況に対峙している。

今日、イザヤ書を歴史批評的に解釈する通時的方法を捨て去ることはできない。イザヤ書には歴史的記述がいたるところに現れ、紀元前8世紀の預言者イザヤ、またイザヤと同時代のユダ王国の王ウジヤ、アハブ、ヒゼキヤに関する記述があるからである。しかし、同時に捕囚期の状況、紀元前6世紀のペルシア王キュロスの名、さらに第二神殿に関する祭儀

的記述も見られる。それらを通時的にどう統一的に説明するかは、錯綜した複雑な編集過程を想定するしかない。それゆえ、イザヤ書を包括的に説明するならば、この書の通時性を排除することなく、共時的に読む方法をも取り入れるということが必要になる。B.S.Childs の正典的方法はその意味で非常に有益な方法としてイザヤ書研究において選択可能になる。本論文が設定している、イザヤ書を包括的統一的に解釈するという目的はそのような研究史的・学術的関心から来るものであり、その目的を遂行するために本論文は入念で慎重なテキスト解釈の議論を展開する。その意味において、本論文の主題「新しいダビデと新しいモーセの待望」は、設定された問いに対する合理的かつ妥当な結論を導き出している。

2. 論文の概要

本論文は、イザヤ書を包括的に読み直す独自の仕方での学術的な試みである。四章構成でイザヤ書の統一的で総括的な解釈が提示される。

第1章「カノンの解釈と B.S.チャイルズ」では、本論文の方法論について詳細な議論が展開される。まず、B.S.Childs (チャイルズ) のカノンの解釈方法の吟味と射程について念入りに議論がなされる。この Childs の方法が本論文の出発点として大変重要となる。この章での重要なポイントは、Childs の正典的解釈について総括的に、また研究史的にきちんと説明をし、この方法がイザヤ書の包括的・統一解釈に適用するにふさわしいものだと述べられたことである。本論文はテキストの通時性と共時性に目を向け、歴史的批判的な方法の限界を見定めつつも、これを否定せず、あくまでカノンとしてテキストを読もうとする。その際に教会の聖書解釈的遺産を重視すべきだとの見解も述べられ、次章以降の議論への道筋が整えられる。

第2章「王の預言：新しいダビデへの希望」は、イザヤ書前半である 1-39 章の部分を扱う。メシア預言のテキストである 7 章、9 章、11 章、さらに 32 章と 4 章をも分析し、1-39 章が一貫した神学を提示していると述べられる。すなわち、メシア預言は歴史的にはヒゼキヤを指しているが、終末論的には「新しいダビデ」を指し示していると結論される。この 1-39 章はいわゆる第一イザヤに属する錯綜し複雑なテキストであるが、それがカノニカルに一貫した流れにおいて説明される。ただし、テキスト分析において扱われるのはメシア預言が集中する導入部の 1-12 章が中心であり、それ以降のテキストが十分に検討されていない不徹底さが審査委員から指摘された。

第3章「主の僕：新しいモーセの待望」は、イザヤ書後半の 40-66 章を扱う。まず 40-55 章に見られる 4 つの「僕の歌」のテキストが分析され、さらに 56-66 章の中心となる 61 章、40-66 章の最初の 40 章が吟味される。それによって、40-66 章に「新しいモーセ」という

一貫したイメージがあることが論証される。いわゆる第二イザヤ（40-55章）と第三イザヤ（56-66章）のテキストにおいて、モーセの名は63章に一度しか出て来ないという問題があるとはいえ、モーセの主題的展開が説得的に論じられる。本論文では「神殿朗詠者集団仮説」が紹介され、39章までのメシア的ヴィジョンが40章以降にも展開される道筋が説明される。この論文第3章については、4つの僕のテキスト分析が詳細になされてはいるが、40-55章内で部分的分析に留まっており、さらなる検証が必要であるとの指摘が審査委員からあった。40-55章全体のテキストの検証という課題は残る。

第4章「ダビデ的人物とモーセ的人物の相互作用」は結論的考察である。本論文第2章と第3章の両方から導き出された結論が繋がって、「新しいダビデ」像と「新しいモーセ」像が相互に作用し、最終的にイザヤ書全体において包括的・統一的なメシア像を描いていることが説明される。それは言い換えると、預言者と律法の繋がりを端的に説明することになる。その背景には礼拝的エートスという生の座があるという最終結論が論者によって提示される。そのようにして、イザヤ書1-39章と40-66章が分離せず、メシア的ヴィジョンにおいて一貫していることがカノンの解釈によって弁証法的に説明される。

3. 先行研究との対話

先行研究については、本論文において十分な対論がされ、それは詳細な脚注での議論と巻末の文献表からも確認される。

本論文はB.S.Childsの方法論を基礎とするが、そのChildsの正典的解釈をまず多角的に紹介し、その可能性と限界を説明している。その際、重要となる文献は、次のようなものである。Biblical Theology in Crisis, 1970; Biblical Theology of the Old and New Testaments: Theological Reflection on the Christian Bible, 1993; The Struggle to Understand Isaiah as Christian Scripture, 2004.

興味深いのは、Childsが1970年代の聖書神学運動を批判するという形で登場したことである。米国における「聖書神学運動」はW.Eichloldt, G.von Rad, R.Bultmannなどドイツ旧約学の影響によるもので「啓示としての歴史」を強調した。これに対して、Childsはあくまでテキストの最終形態を尊重し、カノン概念に固着して、「カノンについて論じることは、聖書の形成から受容までを含めたすべてプロセスに影響を及ぼした、聖書を神学的解釈するための枠組みについて考えることである。」(86頁)という立場だと説明される。

本論文では、カノンの解釈との関係で重要な歴史批評的研究(形態史)のGunkel、また、物語批評のH.W.Frei、ポストモダン解釈のW.Brueggemannとの対論がされる。最近のイザヤ書注解で重要な米国のJ.Blenkinsopp、またドイツ語圏でChildsに近いけれども批判

的に対論する R.Rendtorff をも取り上げている。カノンの解釈については、Childs の後継者であるイエール学派の C.W.Seitz、S.B.Chapman と対論している。特に Seitz は、論者が留学先のトロント大学で直接に指導を受けた教授であっただけに、その解釈に対する深い理解が読み取れる。

イザヤ書研究においては、テキスト最終形態を尊重する *Kompositionsgeschichte* (構造史) の立場で議論をする最近の W.A.M.Beuken, *Jesaja 1-12, 13-27, 28-39 (HThAT)*, 2003-2010; U.Berges, *Das Buch Jesaja*, 1998; H.G.M.Williamson, *Isaiah 1-27 (ICC)*, 2006 など、いずれも浩瀚な先行研究との対論が本論文に見られる。またその先駆けとなった 70 年代の P.R.Ackroyd や最近の M.Sweeney の論文などとの具体的な対論もある。これらの諸文献は論者と関心を同じくするが、テキスト最終形態の解釈において微妙な立場の違いが本論文において浮かび上がってくる。本論文の著者が最近の欧米の統一的イザヤ書研究の諸文献を広く深く渉猟し、その上で独自の議論を展開していることがわかる。イザヤ書のメシア思想に関する文献との対論も興味深い。さらに、日本においてイザヤ書研究で著名な関根清三氏と大島力氏とも対論している。

4. 研究方法

本論文の副題「イザヤ書正典的解釈」が暗示するように、本論文が用いる方法論は Childs の正典的解釈の線である。本論文第 1 章に約 140 頁にわたってその詳細な議論がなされる。

Childs の方法論はカノンを重視したことにあるが、そのカノンは「枠組み」でありながら、その概念は閉じられておらず、それを担う共同体形成に関係すると説明される。その意味において、カノンは教会の伝統的教理に即するものだと Childs は捉える。それは歴史的な文脈の中で、「信仰の基準」に導かれた解釈の主張と言ってよい。本論文もまた、そのようにカノンをダイナミックに捉えている。本論文が教会の伝統的解釈を尊重するゆえんである。つまり、これまで歴史的背景の違いを過度に強調した解釈がされてきたため、イザヤ書全体の形態が歪められ統一的な読み取りができなくなっている状況において、イザヤ書全体のカノンとしてのメッセージを読み取ろうという試みである。本論文はこれについては、聖書の最終形態においてインターテクスチュアリティの存在を想定してテキストを新たに読み取る方法と考えている。それは、聖書の霊的意味をも含む *sensus literalis* 「字義的意味」の探究ということになる。

本論文はイザヤ書を統一的に説明するために、このような Childs の解釈方法を用い、さらに修正を加えている。それは *Kompositionsgeschichte* の重視であり、またカノンの形態史(様式史)的重視であり、さらに旧約における予型論的構造への着目である。

以上のように、本論文は Childs の解釈学的方法の線でイザヤ書の統一的包括的解釈を行う。これは神学的解釈を内包した方法論であって、イザヤ書において歴史批評的解釈を排除せず、テキストの最終形態において統一的包括的メッセージを読み取るという方向である。1-39 章が「新しいダビデ」像を、40-66 章が「新しいモーセ」像をそれぞれイメージし、両者が相互に結び付いて、イザヤ書全体においてメシア的ヴィジョンが一貫していることは、このカノンの解釈方法において見事に遂行される。本論文において、Childs の方法論がイザヤ書の統一的包括的解釈に有用であることは確かである。ただし、Childs の方法論への批判と無理解がいまだに日本の旧約学界に存在する状況もまた認識される必要がある。審査委員の意見もその点に集中した。カノンの解釈においても、文献学的なテキスト分析に徹することが必要であり、カノンの解釈が全面に出すぎることに懸念も表明された。

5. 学術的意義と課題

Childs の解釈について、日本では近藤十郎氏の翻訳による『出エジプト記注解』が知られているのみである。この方法をイザヤ書研究に用いたのは本論文が最初である。Childs とその後継者である Seitz, Chapman を踏まえ、この Childs 学派の方法の線でイザヤ書を統一的包括的に解釈したことは十分に評価できる。トロント大学に提出された論者の修士論文“Anticipating the New David and the New Moses: A Canonical Reading of the Book of Isaiah,” 2013.が指導教授の Seitz によって高く評価され、そのさらなる展開が本論文となった。イザヤ書の統一的解釈がいまだ歴史批評的方法に傾きすぎ、イザヤ書の全体像を捉えきれない研究状況において、テキスト最終形態をあくまでカノンと捉え、詳細なテキスト分析を展開しながらイザヤ書の一貫性を説明した本論文の学術的意義は大きい。とりわけ、イザヤ書前半においてダビデ的イメージ、また後半においてモーセ的イメージが一貫し、全体としてメシア的ヴィジョンが統一的に描かれて、その生の座として礼拝的エートスの存在を説明する形態史的結論には新たな目が開かれる。また、今日、旧約学の歴史批評的方法が教会の伝統的解釈とあまりに乖離しているゆえに、論者が Childs の神学的姿勢を継承して「信仰の基準」を尊重し、聖書神学のみならず他の神学諸領域との対話をも目論む姿勢も評価できる。以下、課題を含めた評価を述べる。

本論文は、カノンの解釈に最大の特徴があるが、テキストの通時性と共時性を繋ぐという仕方での新たなイザヤ書解釈の試みである。それは本論文の論述構想において確かに成功している。けれども、この解釈方法において、通時性の次元がやや曖昧になるという弊害は否めない。それは、本論文においてテキストの最終形態という概念の曖昧さにも通じる。最終形態が教会の伝統に結びつくとなると、旧約聖書それ自体の固有性が希薄になり、新約聖

書も含めた聖書の最終形態となりうる。これについて、「著者・編集者が意図しないインターテキストチャリティーが解釈者によって提示されても、意味の拡張の延長線上にある」(136頁)という説明は、釈義の範疇をいささか超えて、読者が旧約聖書を黙想する場合のいわば実践神学的な論理を示すかに見える。理解はできるが、旧約学のテキスト最終形態は、あくまで旧約聖書(ヘブライ語聖書)それ自体が歴史的に完結した時点で線引きがなされなければならない。これについては、イザヤ書の生の座が「礼拝的エートス」を基盤とするという本論文第4章の結論的説明にも当てはまる。礼拝的エートスは必ずしも歴史にきちんと着地した具体的な説明ではなく、紀元前6世紀から紀元1世紀に至る第二神殿時代という曖昧なイメージにすぎないのではないか、という指摘が審査委員から出た。さらに、テキスト分析についても次のような意見があった。イザヤ書36・39章のヒゼキヤ物語は散文的記述で列王記18・20章とほとんど同一であり、申命記史家の歴史記述から再録されたと見ることができる。その場合、この物語をイザヤ書に付加した編集者は、申命記史家の物語の直後にヨシヤ王物語が存在することを認識していたに違いない。そのような申命記史家的歴史資料をイザヤ書が使用しているならば、イザヤ書はむしろヒゼキヤ王に続くヨシヤ王の到来を暗黙の裡に示唆している可能性もある。いずれにしろ、イザヤ書の前半と後半を繋ぐ鍵となる36・39章のさらなる文献学的検証は必要であり、イザヤ書の歴史性にもっと踏み込む編集史的考察がされなければならないのではないか、という審査委員の指摘である。本論文においてイザヤ書全体が「預言者と律法」の繋がりを意図しているとの結論については、むしろ知恵の伝統において説明されるべきではないかとの審査委員の意見があったことを加えておく。

6. 最終評価

本論文は、カノンという神学的概念が用いられるゆえに、その方法論の有効性について留保条件が付されなければならないが、イザヤ書の統一的解釈を詳細なテキスト分析によって提示したという点で学術的に十分な評価に値する。イザヤという預言者の名を冠する一つの文書でありながら、いまだに統一的な学術的解釈が説得的な仕方では提出されていないイザヤ書の研究史的状况にあって、これまでにないまったく新たなイザヤ書の全体像を見通し、その生の座をも説明した極めて独創的な学術的論文として審査委員会は本論文を高く評価する。